

# 直交ウェーブレットとクンツ環の関係

東邦大学大学院理学研究科  
加藤 雅彦 (修士課程2年)

$L^2([0, 2\pi))$ において、関数  $\psi_L(t) = e^{-it}$  に対して  $\psi_L(nt)$  を対応させるユニタリ作用素を  $U_n$  とすれば  $\{U_n\psi_L\}_{n \in \mathbb{Z}} = \{e^{-int}\}_{n \in \mathbb{Z}}$  は正規直交基底となる。また、 $l^2(\mathbb{Z})$  において関数  $\psi_l(i) = \delta(i)$  に対して  $\psi_l(i-k)$  を対応させるユニタリ作用素を  $T$  とすれば  $\{T^k\psi_l\}_{k \in \mathbb{Z}} = \{\delta(i-k)\}_{k \in \mathbb{Z}}$  は正規直交基底となる。 $U_n$  と  $T$  はそれぞれスケール変換と平行移動に相当する。ウェーブレットはこの両者を組み合わせることによって  $L^2(\mathbb{R})$  の正規直交基底をなすようにした関数族といえる。

$L^2(\mathbb{R})$  上のユニタリ作用素  $U, T$  を

$$(U\xi)(x) = \frac{1}{\sqrt{N}}\xi\left(\frac{x}{N}\right) \quad \text{for } \xi \in L^2(\mathbb{R}), x \in \mathbb{R}$$
$$(T^k\xi)(x) = \xi(x-k) \quad \text{for } k \in \mathbb{Z}, \xi \in L^2(\mathbb{R}), x \in \mathbb{R}$$

と定義する。

**定義 1.** ノルム 1 の関数  $\varphi \in L^2(\mathbb{R})$  が father 関数であるとは、 $V_0 = \overline{\text{span}}\{T^k\varphi | k \in \mathbb{Z}\}$  とするとき

- (i)  $\{T^k\varphi\}_{k \in \mathbb{Z}}$  が  $L^2(\mathbb{R})$  の正規直交系をなし、
- (ii)  $U\varphi \in V_0$ ,
- (iii)  $\bigcap_{n \in \mathbb{Z}} U^n V_0 = \{0\}$ ,
- (iv)  $\overline{\bigcup_{n \in \mathbb{Z}} U^n V_0} = L^2(\mathbb{R})$

を満たすときをいう。

$V_0$  の元  $\xi(x) = \sum_{n \in \mathbb{Z}} b_n \varphi(x-n)$  に対して  $L^2(\mathbb{T})$  の元  $m(e^{-it}) = \sum_{n \in \mathbb{Z}} b_n e^{-int}$  を対応させる等距離写像を  $\mathcal{F}_\varphi$  とする。 $\xi \in U^{-1}V_0$  に対して  $m_\xi = \mathcal{F}_\varphi(U\xi)$  とおき、 $\xi$  および  $\varphi$  のフーリエ変換をそれぞれ  $\hat{\xi}, \hat{\varphi}$  で表すことにすると、

$$\sqrt{N}\hat{\xi}(Nt) = m_\xi(e^{-it})\hat{\varphi}(t) \quad t \in \mathbb{R}$$

という関係が成り立つ。

**定義 2.**  $N \geq 2$  に対して、等距離作用素  $s_0, \dots, s_{N-1}$  が

$$s_i^* s_j = \delta_{ij} I, \quad \sum_{i=0}^{N-1} s_i s_i^* = I$$

を満たすとき、 $C^*(s_0, \dots, s_{N-1})$  をクンツ環といい、 $\mathcal{O}_N$  で表す。

次に述べることからクンツリレーションが導かれる。  $\rho = e^{2\pi i/N}$  とする。

**命題 3.**  $\xi, \eta \in U^{-1}V_0$  とする。すべての  $k \in \mathbb{Z}$  に対して  $\xi \perp T^k \eta$  となるための必要十分条件は

$$\sum_{k=0}^{N-1} \overline{m_\xi(z\rho^k)} m_\eta(z\rho^k) = 0 \quad \text{a.a. } z \in \mathbb{T}$$

となることである。また、 $\{T^k \xi\}_{k \in \mathbb{Z}}$  が正規直交系をなすための必要十分条件は

$$\sum_{k=0}^{N-1} |m_\xi(z\rho^k)|^2 = N \quad \text{a.a. } z \in \mathbb{T}$$

となることである。

$m_0 = m_\varphi$  とする。  $m_1, \dots, m_{N-1} \in L^2(\mathbb{T})$  を関係式

$$\sum_{k=0}^{N-1} \overline{m_i(z\rho^k)} m_j(z\rho^k) = \delta_{ij} N \quad \text{for } z \in \mathbb{T}, i, j = 0, \dots, N-1$$

を満たすように選び、  $\psi_1, \dots, \psi_{N-1}$  を

$$\sqrt{N} \hat{\psi}_i(Nt) = m_i(e^{-it}) \hat{\varphi}(t) \quad \text{for } t \in \mathbb{R}, i = 1, \dots, N-1$$

によって定義すると、  $\{T^k \psi_i\}_{k \in \mathbb{Z}, i \in \{1, \dots, N-1\}}$  は  $U^{-1}V_0 \cap V_0^\perp$  の正規直交基底となり、さらに  $\{U^n T^k \psi_i\}_{n, k \in \mathbb{Z}, i \in \{1, \dots, N-1\}}$  は  $L^2(\mathbb{R})$  の正規直交基底となる。

$L^2(\mathbb{T})$  上の作用素  $S_0, \dots, S_{N-1}$  を

$$(S_i \xi)(z) = m_i(z) \xi(z^N) \quad \text{for } \xi \in L^2(\mathbb{T}), z \in \mathbb{T}, i = 0, \dots, N-1$$

と定義すると、  $m_0, \dots, m_{N-1}$  が先ほどの関係式を満たすことと  $S_0, \dots, S_{N-1}$  が

$$S_i^* S_j = \delta_{ij} I, \quad \sum_{i=0}^{N-1} S_i S_i^* = I$$

を満たすことが同値となる。

## 参考文献

- [1] Ola Bratteli, Palle E. T. Jorgensen, *Isometries, shifts, Cuntz algebras and multiresolution wavelet analysis of scale N*, Integral Equations Operator Theory, **28**, no 4, 382–443 (1997). arXiv:funct-an/9612003
- [2] Ola Bratteli, Palle E. T. Jorgensen, *A connection between multiresolution wavelet theory of scale N and representations of the Cuntz algebra  $\mathcal{O}_N$* , Operator algebras and quantum field theory (Rome, 1996) (Doplicher, S. (ed.) et al.), International Press. 151–163 (1997). arXiv:funct-an/9612006